

福知山市文化協会創立八十周年記念

文学のしるべ建立作品集

句歌の余光

— 福知山に咲いたことばたち —

公益社団法人福知山市文化協会

文学のしるべ建立作品集発刊にあたって

公益社団法人福知山市文化協会 会長 前田 竹司

昭和五十年から続いておりました文化協会の事業としての「文学のしるべ建立」事業は令和六年度をもって終了となりました。五十年間という長きにわたり、これまで多くの方に投稿いただきましたことをここにあらためて感謝申し上げます。

この度、本事業を終了するにあたり、建立してきました作品を冊子にまとめ発刊する運びとなりました。

この事業のスタートは当時本協会副理事長故上垣松之助氏の提案により始まりしました。最初の地は三段池公園に建立し、それ以後昭和五十二年に福知山十景などを基に適地として建立を続けてまいりました。

建立作品については当初は加盟団体の俳句、川柳、短歌の会員の作品からでしたが、より多くの市民にも関心を持っていただこうと一般公募とし、新聞や全戸回覧文書等でも募集し、選者により短歌・俳句・川柳各二首（句）計六首（句）を選び建立してきました。近年では各一基と縮小し、終了までに建立してきた数は二百八十七基に及びます。

数々の作品はその地の情景に作者の心象がうまく表現されており、訪れる人々に、ほのかな文化の薫りを与えており、また書道連盟の方々の素晴らしい書により、訪れる人々に、ほのかな文化の薫りを与えておりました。

建立の事業は終了しましたが、文化の薫る風土は確実に根付いていると思います。今後三団体の皆様には文化的風土の醸成に寄与していただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

結びにあたり、これまで関わっていただいた関係の皆様に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも文化的風土のより向上を求めて御精進されますことを心より御祈念申し上げます。

福知山の風土とともに歩んだ文学のしるべ

丹波歌人社 代表 加島 のぶ

福知山市文化協会が行っている「文学のしるべ」は短歌、俳句、川柳からなります。

文学のしるべは「福知山十景」の選定を契機に一九七五（昭和五十）年に初めて三段池公園に建立して以来、令和六年度で五十回をむかえました。五十回を節目に一旦終わりと決まりました。五十回の長い月日の間には多くの方の応募があります。そしてそれをその都度選定、句碑の準備、現地への建立と多くの方の手を得て長い間続けて来られました。

文学のしるべの碑板は、この福知山ならではの自然のなかで、見る人に安らぎを与えてきました。記録を紐といてみますと、第一回は昭和五十年、三段池公園の句碑「ここにして大きく曲がる由良川は息を立てつつ朝明けにける」、早川亮先生の句碑でした。早川亮先生は丹波歌人社を発足されました。丹波歌人社は現在、年一回の短歌大会と、年二回、丹波歌人誌を発行し活動を続けています。また、年一回の短歌教室を開催しており、一人でも短歌の仲間が増えることを願っています。

散策のつれづれに、あるいは訪れた由緒あるこの地にあって、「しるべ」との出会い、情景や作者の心象におのずと惹かれ、文化のかおりを感じます。これで終わるのではなく、また形を変えて、福知山十景に短歌、俳句、川柳を通して福知山の文化が多くの人に伝えられることを願います。

文学のしるべ終結に寄せる回想

福知山市俳句連盟 代表 西村 白杼

昭和五十年度から始まりました文学のしるべが、令和六年度で五十回となり終了する運びとなりました。一口に五十年と言いますが、五十年間一度も欠かさず続けることは、ボランティア精神がなければできません。

一回目の俳句部門の細見鳥外さん、村島雨郎さんも存じません。作品を見ると今でも素晴らしいと思いますが、顔も名前も知らない位、半世紀は長く重い年月なのです。これもひとえに福知山市文化協会の皆様のお陰で持続できたものと思います。名前を見ていて、ようやく昭和六十二年度の作品に至り、お顔と名前が一致しました。私が、俳句を始めた頃なのです。下手なりにいつの間にか四十年間楽しく俳句の世界に浸っていました。本当に長いようで短い四十年です。福知山市文化協会のお世話があつてこそ、楽しく字を追いかけて遊べました。令和六年十一月までに、二百八十七基の句碑を建立し続けて、しかも作業着で古い句碑を掘り返し新しい句碑を形よく建立するために、毎回、懸命に頑張っていた皆様のおかげで続けられました。

長く続いた文学のしるべは、この記念誌をもって終了ですが、歴史は末代まで語り継がれることでしょう。携わってきて頂きました皆様、常に応募して頂きました方々に感謝の意を差し上げます。大先輩に申し訳ありませんが、若輩の私が代筆をさせていただきました。

出会いと学びの五十年　　文学のしるべ終了に寄せて

福知山市民川柳同好会　代表　永峯 八重

自然豊かな福知山の十景を選び「文学のしるべ」が建立されてきました。

五十年を経て、終了とのこと。寂しいことですが、区切りとして仕方ありません。

建立にあたって、福知山市文化協会の皆様には大変な御尽力をいただきました。改めてお礼申し上げます。

建立して頂いた方は、川柳を作ることの楽しさ、そして自信へとつながって行きました。五十年の歴史を感じるこの記念誌で、かつての柳友、そして師匠方に出会える事を楽しみにしています。

「文学のしるべ」は終わりますが、福知山の文化がますます発展する事を信じています。

ありがとうございました。

目次

第一回	昭和五十年年度（一九七五）	三段池公園	………	1
第二回	昭和五十一年度（一九七六）	長安寺公園	………	2
第三回	昭和五十二年年度（一九七七）	福知山城跡	………	3
第四回	昭和五十三年度（一九七八）	平和公園	………	4
第五回	昭和五十四年度（一九七九）	天寧寺	………	5
第六回	昭和五十五年年度（一九八〇）	観音寺	………	6
第七回	昭和五十六年度（一九八一）	三岳山	………	7
第八回	昭和五十七年度（一九八二）	長田野工業団地	………	8
第九回	昭和五十八年度（一九八三）	御霊神社	………	9
第十回	昭和五十九年度（一九八四）	養泉寺	………	10
第十一回	昭和六十年年度（一九八五）	三段池公園	………	11
第十二回	昭和六十一年度（一九八六）	長安寺公園	………	12
第十三回	昭和六十二年年度（一九八七）	福知山城公園	………	13
第十四回	昭和六十三年度（一九八八）	三段池公園	………	14
第十五回	平成元年度（一九八九）	三岳青少年山の家	………	15
第十六回	平成二年度（一九九〇）	観音寺	………	16
第十七回	平成三年度（一九九一）	天寧寺	………	17

第十八回	平成四年度 （一九九二）	長野野工業団地	:	:	:	:	:	:	:	18
第十九回	平成五年度 （一九九三）	養泉寺	:	:	:	:	:	:	:	18
		平和公園	:	:	:	:	:	:	:	19
		福知山城	:	:	:	:	:	:	:	19
第二十回	平成六年度 （一九九四）	三段池公園	:	:	:	:	:	:	:	20
		御霊神社	:	:	:	:	:	:	:	20
第二十一回	平成七年度 （一九九五）	三岳青少年山の家	:	:	:	:	:	:	:	21
		長安寺	:	:	:	:	:	:	:	21
第二十二回	平成八年度 （一九九六）	観音寺	:	:	:	:	:	:	:	22
		天寧寺	:	:	:	:	:	:	:	22
第二十三回	平成九年度 （一九九七）	長野野工業団地	:	:	:	:	:	:	:	23
		養泉寺	:	:	:	:	:	:	:	23
第二十四回	平成十年度 （一九九八）	福知山城	:	:	:	:	:	:	:	24
		平和公園	:	:	:	:	:	:	:	24
第二十五回	平成十一年度 （一九九九）	三段池公園	:	:	:	:	:	:	:	25
第二十六回	平成十二年度 （二〇〇〇）	御霊神社	:	:	:	:	:	:	:	26
		春影稲荷神社	:	:	:	:	:	:	:	26
第二十七回	平成十三年度 （二〇〇一）	長安寺	:	:	:	:	:	:	:	27
		天寧寺	:	:	:	:	:	:	:	27

第二十八回	平成十四年度 (二〇〇二)	観音寺 三岳青少年山の家 長田野公園 養泉寺 福知山城 平和公園 三段池公園 御霊公園 御霊神社	…… …… …… …… …… …… …… …… ……	28
第二十九回	平成十五年度 (二〇〇三)	長田野公園	……	29
第三十回	平成十六年度 (二〇〇四)	福知山城	……	30
第三十一回	平成十七年度 (二〇〇五)	三段池公園	……	31
第三十二回	平成十八年度 (二〇〇六)	御霊公園	……	32
第三十三回	平成十九年度 (二〇〇七)	長安寺	……	33
第三十四回	平成二十年 度 (二〇〇八)	天寧寺	……	33
第三十五回	平成二十一年 度 (二〇〇九)	観音寺	……	34
第三十六回	平成二十二 年度 (二〇一〇)	三岳青少年山の家	……	34
第三十七回	平成二十三 年度 (二〇一一)	長田野公園	……	35
第三十八回	平成二十四 年度 (二〇一二)	福知山城	……	35
		養泉寺	……	36
		三段池公園	……	37
		福知山城	……	38
		御霊神社	……	38

第三十九回	平成二十五年度	(二〇一三)	長安寺	………	39
第四十回	平成二十六年度	(二〇一四)	天寧寺	………	39
第四十一回	平成二十七年度	(二〇一五)	三岳青少年山の家	………	40
第四十二回	平成二十八年度	(二〇一六)	福知山城	………	41
第四十三回	平成二十九年度	(二〇一七)	三段池公園	………	41
第四十四回	平成三十年度	(二〇一八)	御霊神社	………	42
第四十五回	令和元年度	(二〇一九)	養泉寺	………	43
第四十六回	令和二年度	(二〇二〇)	長安寺	………	44
第四十七回	令和三年度	(二〇二一)	醍醐寺	………	44
第四十八回	令和四年度	(二〇二二)	観音寺	………	45
第四十九回	令和五年度	(二〇二三)	福知山城	………	45
第五十回	令和六年度	(二〇二四)	天寧寺	………	46
			三段池公園	………	46
			洞玄寺	………	47
			御霊神社	………	47

第一回 昭和五十年（一九七五）

三段池公園

短歌

こゝにして大きく曲る由良川は息を立てつつ朝明けにけり

早川 亮

風化して骨片さえもなき古墳街のざわめきを風がつたえる

上垣 松之助

俳句

寒雀野の一本に声ひらく

細見 鳥外

風花や丹波に古き陶の村

村島 雨郎

川柳

自画像を描けば一枚の枯葉

長藤 泰敏

咲ききりし牡丹の緋ゆえ哀しくて

松山 温子

第二回 昭和五十一年度（一九七六）

長安寺公園

短歌

室山にひとひら黄なる雲寄りてゆうべ輝く冬はおる日に

掃部 千歌

姫髪の山ふところに抱かれて薬師如来のみそなはすみ寺

菅野 房乃

俳句

つづけさま鐘がなるなり春霞

根本 掬泉

うららかや石段数えつゝ忘れ

吉田 大江

川柳

なにもしてやれなかった亡母を拾う箸

芦田 菊枝

黄の傘に雨歌わせて子が帰る

塩見 さと

第三回 昭和五十二年（一九七七）

福知山城跡

短歌

山峡に霧をふくみて吹く風の夕べはさむくなりけるかな

六車 勇

咲き盛るころのぼり来て城跡の花に思い出つなきて歩く

日和 初子

俳句

街よりも城跡に早き秋の色

西田 円史

城櫓花雪洞に映えてきし

西本 中江

川柳

さいはての夫婦をおもう花の雨

羽田 国子

子を語る友に女の距離がある

前田 好子

第四回 昭和五十三年度（一九七八）

平和公園

短歌

展けゆく吾が街遥か俯瞰して永久の平和を守る忠魂碑

細見 千代子

戦死せし馬の墓石に手向くると摘みしれんげは束ねて紅し

福田 堯

俳句

秋の蝶忠霊塔の辺を去らず

芦田 三千代

少年兵冥るよ花の日溜りに

芦田 呂甫

川柳

耳を澄ませば軍歌聞える平和墓地

中川 ふみ

鎮魂歌一段ごとを登りつめ

嶋田 ますゑ

第五回 昭和五十四年度（一九七九）

天寧寺

短歌

大きな蛇のうろこの一かけら唐天竺超え来てここに止まる

雀部 喜太郎

そのかみの七堂伽藍顕たしめて芝生はひろく秋の日のいろ

菅沼 政子

俳句

蓮枯れて雪が近しよ山の寺

土田 祈久男

放生池蛇すみつきて水すまず

井上 六太郎

川柳

夜の露天にのぼれば星となる

二条久保 真子

石一つ置いて余生の庭とする

片山 純子

第六回 昭和五十五年度（一九八〇）

観音寺

短歌

色深くみ堂彩どる紫陽花に雨ふりきたり藍の流るる

大槻 寿賀野

虫送りの千灯一斉にともされて観音堂まで続く灯の道

大槻 秀子

俳句

行く春を右に左に仁王像

松山 橘香

菩薩出でませ紫陽花の毬つきに

藤田 未捷

川柳

懺悔するところを夕陽からもらう

足立 玲子

無理のない橋かけ合って姑と嫁

大槻 雅子

第七回 昭和五十六年度（一九八二）

三岳山

短歌

穂芒の揺るる彼方に湧く雲をまとい古里の山と鎮もる

渋谷 計二

雲湧けるふるさとの山に向い佇つ流離の一世の思いせつなく

上垣 松之助

俳句

雲海の遠嶺に虹の生まれきし

村山 一棹

郭公や桧山杉山青単衣

横岡 たかを

川柳

雲海へ一瞬煩惱消されたり

芦田 幸恵

厳しさと優しさ三岳は母の山

大槻 和子

第八回 昭和五十七年度（一九八二）

長田野工業団地

短歌

新しく産みなしやまぬ長田野のま愛しきまで鉄うつひびき

松原 浩司

それぞれに緑のフェンス巡らせて建ち並びたる工場の群

阪根 まきの

俳句

白炎天上がる工煙透きとおり

高橋 真砂

城址も工業団地も虹の中

杉山 つとむ

川柳

噴水の四季を絵にして建つ団地

池内 邦子

長田野の風青年の意気もち

芦田 公子

第九回 昭和五十八年度（一九八三）

御霊神社

短歌

競いたる祭太鼓も納まりてみたま鎮もる小春日の園

田中 愛子

公園の露店に惹かれし幼な日よ奉納太鼓の響きはじめぬ

高橋 きぬ枝

俳句

神苑に春めくものの大樹より

植村 枳秋

街騒を容れぬ神苑蟬しぐれ

酒井 典子

川柳

免税と決めて光秀名を残し

福井 汀亭

光秀と踊りの好きな街に住み

土田 泰子

第十回 昭和五十九年度（一九八四）

養泉寺

短歌

一筋の風道なるか揺れ止まぬ萩のこぼせる白き花びら

和田 秀子

まぼろしは黄の蝶となり纏れつつ乱るる萩の白きに紛る

榎原 たか

俳句

仏灯に光るあまたの萩の露

大島 珠水

禅寺のあまたの萩の白が佳し

飯田 佳芳

川柳

慈母観音の笑顔いちにち戴きぬ

瀬川 津磨子

慈悲と愛つつみかくして萩の寺

片山 美代子

第十一回 昭和六十年（一九八五）

三段池公園

短歌

蟬しぐれ耳に残して科学館の星の夜空を見と翔び廻る

小野山 綾子

池ゆ生るる湿りし風の追いゆきてきまだら蝶を見失いたる

坂東 布美乃

猿山に冷たく時雨きたる夜を子猿は母に寄りそい寝ねむ

藤田 利子

俳句

初蝶のつかず離れず遊歩道

石鍋 裕千

この池をふるさとして通し鴨

宮本 幸子

山水の音昁り初む法師蟬

中井 清

川柳

白鳥を絵にして三段池の四季

さかね ひろし

白鳥よ古墳の私語が聴こえるか

飛田 仙花

ふりむけば古墳風に眠りを醒まされる

荻野 美智子

第十二回 昭和六十一年度（一九八六）

長安寺公園

短歌

いく百の樹齡かさねし大銀杏空を支えて揺るがざるなり

井上 さわの

等間隔に置かれし石のまろやかに鐘楼につづくを僧渡ります

上久保 節子

俳句

戸を開き仏にも見す寺紅葉

村上 笑子

石庭の箒目秋日濃かりけり

谷垣 昭子

川柳

噂ばなし心に雨が欲しくなる

谷垣 利子

生きる糧合わす両掌の中にある

塩見 末野

第十三回 昭和六十二年度（一九八七）

福知山城公園

短歌

城垣の大石小石語りかけ四百年のすぎゆき伝う

日和 初子

城の井は深いので昼の星の天正の空が映っていた

川口 克己

俳句

灯の入りて花に浮きたつ天守閣

菅沼 まさご

再建の城へ誘ふ道をしへ

伊豆 奈津子

川柳

野火疾るわれに恥辱のある限り

長藤 泰敏

残照にせかされてひく虹の彩

松山 温子

第十四回 昭和六十三年（一九八八）

三段池公園

短歌

昭和の代生きえて国体迎えしとコートに老ら写真撮りあう

園児らが未来よびかくるかけ声に国体の秋熱くふくらむ

はるばると来たる選手らこの丘に郷土の誇り高く掲げつ

菊日和国体讃歌この丘に

国体旗靡く秋天城下町

秋高し音無瀬の火を掲げけり

国体のロマンへ目覚める埴輪の眠

技人の胸に残れよ城の町

炬火走る丹波はふかい霧の国

片岡 節子

和田 秀子

榎原 たか

植村 千寿

芦田 ひろ子

松山 橘香

審 敏男

富田 千之助

河村 勉

俳句

川柳

第十五回 平成元年度（一九八九）

三岳青少年山の家

短歌

湧く霧の峡這いのぼり明けゆきて下界を鎖す雲海となる

岡巻 登美子

ふるさとの嶺に佇み山の気につつまれて天の光浴びいる

柏 きみよ

俳句

山の影山へ落して夕焼くる

由良 邦雄

雲海の上に田があり威し銃

田辺 たか

川柳

画用紙が狭いと山が怒っている

向山 幽甫

雑草のいのちと今日を競いあう

古田 千代野

第十六回 平成二年度（一九九〇）

観音寺

短歌

紫陽花の藍の濡れいる寺庭に梅雨の晴れ間の光みなぎる

田中 きぬる

花の向き定まらずして紫陽花の重き毬玉にしとど露置く

蒲 幸子

俳句

紫陽花に彩配りゆく通り雨

松山 紀子

一山の紫陽花毬を重ねつつ

塩見 柿村

川柳

転生のいのちを観音杉に聴く

楠岡 潤人

いのち尊し紫陽花の露掌にうける

田村 悦子

第十七回 平成三年度（一九九二）

天寧寺

短歌

周及禪師座らせ給うや放生の池のき中の大きな蓮の葉

大槻 さく江

み仏のみ声ときかむかすかなる音たて蓮の花ひらく朝

矢野 美恵

俳句

蓮ひらく大日如来の光享け

前崎 三千代

鐘樓の端に月あり茶筌塚

堂北 緋佐子

川柳

ぶらり来て羅漢とあそぶひとり旅

飛田 茂

人ひとり許して命あたためる

産田 佐代子

第十八回 平成四年度（一九九二）

長田野工業団地

短歌

幾何学模様に空を画せる高圧線工業団地は終夜灯せり

大槻 奈美子

俳句

工場の塀の限りを躑躅咲く

松井 栄子

川柳

ちぎり絵のひとこまに置く兵の跡

大槻 和枝

養泉寺

短歌

乱れ咲く萩のまにまに風生れて刻揺らしいる白のしたたり

植山 友代

俳句

千条に枝垂れし萩を風が梳く

前崎 とし江

川柳

百歳へつづく余生の花暦

足立 耀子

第十九回 平成五年度（一九九三）

平和公園

短歌

樹々深き公園の鳥となりし靈遊ぶ子ら守り澄む声交わす

小林 玲子

俳句

虫時雨はげし一兵卒の墓

田中 まさゑ

川柳

聖戦と信じて逝きし兵眠る

辻本 きよ子

福知山城

短歌

豊磐井の底ひに湧ける水の音しだくさ茂る奥より聞こゆ

浅野 やい子

俳句

部戸を開けて天守へ花の風

足立 志津子

川柳

四季の絵の真ん中におく天守閣

永峯 八重

第二十回 平成六年度（一九九四）

三段池公園

短歌

科学館のプラネタリウムに見る星座しばし宇宙の人となりいる

柴田 セツ子

俳句

鴨常に視野の内なり遊歩道

塩見 芳子

川柳

鬼となる釘一本が打ち込めず

高階 秀峰

御霊神社

短歌

境内に桔梗の咲ける光秀忌野点の席に拝鈴ひびく

向山 千代子

俳句

光秀を祀りし宮の七五三

駒崎 八重子

川柳

子に灯す愛の火種を吹きつづけ

畑山 喜千坊

第二十一回 平成七年度（一九九五）

三岳青少年山の家

短歌

風渡る三岳嶺に立ち頼光の鬼住む尾根を遠く望めり

柏 きみよ

俳句

雲海へ登校の列下りてゆく

西田 円史

川柳

手のひらに針一筋の道がある

荻野 やよい

長安寺

短歌

紅葉散る寺苑のほとり耳研ぎて聞く水琴の妙なるひびき

小林 三来

俳句

磴登る一步一步に紅葉濃し

宮本 美恵子

川柳

運のよいきっかけだった鶴になる

石井 千代江

第二十二回 平成八年度（一九九六）

観音寺

短歌

千日会千の灯りの連なりて隠し世に照る巨き仁王門

大槻 美佐江

俳句

紫陽花の彩を盡くして雨に咲く

富士原 ひさ女

川柳

あじさいにもたれてねむる水子仏

足立 玲子

天寧寺

短歌

亡き夫を恋いつつ来れば三岳嶺の風に騒立つ天寧寺の庭

大槻 あき子

俳句

茶筌塚光りて続く露の道

間島 明美

川柳

山門に煩惱ひとつ解き放つ

荻野 美智子

第二十三回 平成九年度（一九九七）

長田野工業団地

短歌

プラタナスの並木の影のバーコードジョギングの朝の工業団地

藤田 光子

俳句

霧に灯の動き工業団地覚む

高藤 波翠

川柳

噴水の真上にこころの駅がある

小林 正登

養泉寺

短歌

人去りしのちを静かに散る萩のはなびら清し夕つ陽のなか

外賀 仁美

俳句

本堂に白萩の風通しけり

西村 滋子

川柳

煩惱とおぼしきあたり風が舞う

樋口 裕花

第二十四回 平成十年度（一九九八）

福知山城

短歌

咲く花にかこまるる日の天守閣春ごとめぐる生きの思い出

牧 としゑ

俳句

新涼を空と分かれて天守聳つ

塩見 瑞代

川柳

ライトアップの城も踊りの輪の中に

中村 美壽栄

平和公園

短歌

風に鳴る杉の木立のかこむ園風鎮まればみ霊らの声

奥田 昭子

俳句

草の絮飛ぶしづけさや兵の墓

堂北 緋佐子

川柳

星が降る勇士が冥る平和墓地

藤下 房子

第二十五回 平成十一年度（一九九九）

三段池公園

短歌

秋のいろ湛うる池に寄り添える水鳥の抱く風のかがやき
はぜ楓どうだんつつじそれぞれに夕陽をよせて公園の道

河合 しづ

長岡 妙子

俳句

菰巻きて赤松池へ身を反らす

藤田 魯朴

さざ波に寄らず離れずつがい鴨

大槻 琴恵

川柳

野分以後なお賑やかな鴨の池

駒居 とし子

彼岸花古墳の丘を火の海に

長藤 泰敏

第二十六回 平成十二年度（二〇〇〇）

御霊神社

短歌

新しき朱塗り舞殿男の子らの明日へ満つる太鼓のひびき

前寄 弘子

俳句

光秀の宮煌々と夏の月

塩見 芳子

川柳

町興し御霊太鼓にある活気

北村 幸智子

春影稻荷神社

短歌

みやしろの朱の御柱陽に映えて春影稻荷眺望の陵

樽井 町子

俳句

見晴るかす町も変遷宮の秋

神谷 芳子

川柳

わが町の鬼門を守る神の城

片山 純子

第二十七回 平成十三年度（二〇〇一）

長安寺

短歌

黄の扇ふりほどき散る大銀杏目守る幾年里の移りを

矢持 玲子

俳句

千年の大樹の梢磴涼し

大串 忍

川柳

公孫樹に母なるいのち宿らせる

榎原 はるみ

天寧寺

短歌

空を舞う龍を描ける天井画檜の香清しく建つ薬師堂

大槻 さよ子

俳句

石仏に秋の木洩れ日濃かりけり

足立 柳太郎

川柳

佛の灯に愚かな心照らされる

足立 正子

第二十八回 平成十四年度（二〇〇二）

観音寺

短歌

寺庭の万の紫陽花雨にぬれ藍流しつつ吾を染たり

田中 延子

俳句

あじさいの毬で遊ばむ水子たち

奥村 皐月

川柳

あじさいの真実ほとけの声がする

谷口 貞雄

三岳青少年山の家

短歌

山岳嶺の山ふところに抱かれて木の香に満ちし山の家夏

溝畠 つたえ

俳句

熊よけの鈴をならして修験道

大林 令呼

川柳

雲海に天女も手を振る三岳山

大槻 和子

第二十九回 平成十五年度（二〇〇三）

長田野公園

短歌

噴水の水高だか入りつ日の光砕きつつ団地くれゆく

井上 久恵

俳句

長田野の森の広さに虫時雨

中村 清孝

川柳

長田野にいのちの燃える朝がくる

飛田 茂

養泉寺

短歌

吹きみちし萩のこぼるる寺坂を上れば微風香をはこびくる

和久 武志

俳句

観音の御手よりこぼる萩の花

前崎 とし江

川柳

萩寺へ萩の輪廻に逢いに行く

谷垣 利子

第三十回 平成十六年度（二〇〇四）

福知山城

短歌

水満ちし豊磐の井を思いては向かう城址へ咲く曼珠沙華

大槻 清子

俳句

城の井の闇を照らして望の月

堂北 緋佐子

川柳

天守閣見えて車窓の旅終わる

大槻 閑枝

平和公園

短歌

幾星霜めぐる彼岸会もののふのみ霊寧かれ流るる読経

外賀 仁美

俳句

花吹雪隈無く浴びて兵の墓

下村 冴子

川柳

遥かはるかのかだまが還る平和墓地

楠岡 潤人

第三十一回 平成十七年度（二〇〇五）

三段池公園

短歌

青深き水に真夏の陽がはじけ三段池はひかりの器

小野山 綾子

幾年を育ちし赤松公園の池より吹き上ぐる風の声聞く

田中 久枝

俳句

百幹の松梳く風も秋の声

鹿嶋 玉野

古墳より望む城下の豊の秋

宮本 幸子

川柳

そつと覗けば鴨の家族で和む池

依藤 茂子

あずまやにすうつと座る風がある

足立 美穂子

第三十二回 平成十八年度（二〇〇六）

御霊神社

短歌

移りゆく時代を越えて街人の集うを見守る御霊公園

矢持 玲子

俳句

舞殿に風とあそべる秋の蝶

浅田 忠彦

川柳

光秀を讃え踊りの輪が弾む

富田 千之助

醍醐寺

短歌

移りゆく時忘れさせみ仏の霊を抱きて聳ゆる巨杉

小田 いづみ

俳句

山門を潜れば花の浄土なり

田中 絢子

川柳

石に掛け天下国家を思案する

熊谷 辰馬

第三十三回 平成十九年度（二〇〇七）

長安寺

短歌

しんしんと大きな紅葉にふりそそぎ光を揺らす寺庭の夕日

吉田 克子

俳句

蟬しぐれ城主の墓は寂として

池田 和子

川柳

大文字紅葉の寺を懷に

大槻 神之助

天寧寺

短歌

秋光をうけて静もる薬師堂いろ鮮やかな瑠璃光の文字

足立 満子

俳句

蓮巻葉ほどける法の風を享け

塩見 瑞代

川柳

灯を点す蓮のうてなにある浄土

藤下 房子

第三十四回 平成二十年度（二〇〇八）

観音寺

短歌

観音寺石仏めぐればあじさいの青き光の我を染めたり

田中 敏子

俳句

一山の四葩に遊ぶわらべ仏

宮本 美恵子

川柳

あじさいに水子も染まる観音寺

大槻 和江

三岳青少年山の家

短歌

静寂を不意にやぶりて若きらの歌声あがる三岳山の家

坂根 まきの

俳句

朝霧や修験の杖に鈴つけて

森本 路石

川柳

雲海の彼方は弥陀の浄土かも

藤原 美代子

第三十五回 平成二十一年度（二〇〇九）

長田野公園

短歌

長田野公園散歩の人ら行き交えばブロンズ像にさす光穏し

畑 慶子

俳句

未来へとつなぐ長田野揚雲雀

大林 令呼

川柳

長田野に夢と希望の陽が昇る

津江 美津子

洞玄寺

短歌

きざはしを登ればぼうたん彩と香の満ちる洞玄寺人のたえざり

大槻 恭子

俳句

繚乱の牡丹に鐘のひびきけり

伊豆 奈津子

川柳

百段を登り菩薩の手に触れる

田中 鈴子

第三十六回 平成二十二年度（二〇一〇）

福知山城

短歌

秋の日にそびえる天守カンプスに完成近し福知山城

塩見 操

俳句

城垣にひめたる史跡桔梗咲く

竹下 淑子

川柳

変わりゆく街を見下ろす天守閣

今田 さかゑ

養泉寺

短歌

天籟につつまれ鎮もる養泉寺萩ゆれやまぬ夕映えの中

石鍋 照代

俳句

法の風白く地を染むこぼれ萩

公手 幸子

川柳

一枝の萩にも慈悲の風白う

飛田 きよ子

第三十七回 平成二十三年度（二〇一一）

三段池公園

短歌

あの日見し「みわとうり坊」散歩する影を追いつつ秋を吹く風

田中 延子

三段池に万のランナー健脚を競いて集う福知山マラソン

高橋 明美

俳句

さざ波の池を照らして望の月

堂北 緋佐子

親子連れ餌がへしの秋日和

芦田 伊津子

川柳

松影も心の綾も写す池

荒田 直

水澄んで池の水面に心棲む

田中 笛奈

第三十八回 平成二十四年度（二〇一二）

醍醐寺

短歌

丹波路の果てる山路に醍醐寺の紅葉の中になほ紅葉あり

大島 正和

俳句

曝涼や古文書多き山の寺

荒木 千恵子

川柳

山門に立てば御法の風を受け

木戸 利枝

御霊神社

短歌

光秀をしのぶ社や秋祭り御霊太鼓は街を揺るがす

小林 鈴子

俳句

白桔梗光秀称え凜と咲く

奥村 皐月

川柳

光秀と平安祈る御霊の社

田中 百合子

第三十九回 平成二十五年度（二〇一三）

長安寺

短歌

深々ともみじ青葉に鎮もれる寺苑歩めばみ仏に会う

大槻 淳子

俳句

木洩れ日も涼しさとなる古刹かな

雲川 漣子

川柳

煩惱を薬師如来に預け置く

吉見 和江

天寧寺

短歌

花満ちて山寺座してをりしとき弁当へ散る一片の花

杉森 大介

俳句

蓮池の大葉を揺らす弥陀の風

谷村 和子

川柳

羅漢図に心洗わる蟬しぐれ

秋山 恵美子

第四十回 平成二十六年(二〇一四)

観音寺

短歌

仁王像に迎えられ参る観音寺往時を思いて寺苑を歩む

井上 志げ乃

俳句

臘梅に庭ひとめぐりふためぐり

植村 太加成

川柳

浄土へと水子供養の花の寺

吉良 郁江

三岳青少年山の家

短歌

同窓会に集いて賞でし雲海の想い出はるか山の家の秋

遠山 真智子

俳句

コスモスの揺れて明るき山の風

横岡 たかを

川柳

雲海に懷かれ祈りを深くする

藤下 房子

第四十一回 平成二十七年度（二〇一五）

福知山城

短歌

古の息づき聞こゆる福知山城野点の席に一会の桔梗

外賀 仁美

俳句

天高し四方見渡す天守閣

太田 笑美子

川柳

城壁の光と陰を知る桔梗

永峯 八重

洞玄寺

短歌

山門をくぐれば穏しき光まとい菩薩のならぶ洞玄寺の庭

田中 淑子

俳句

新緑やたをやかに立つ観世音

塩見 瑞代

川柳

菩提寺の牡丹御仏の声がする

田中 百合子

第四十二回 平成二十八年度（二〇一六）

三段池公園

短歌

三段池の立つきざ波に誘われ師を偲びつつ歌碑へと歩む
子と歩む三段池の散歩道ほろほろ揺るる早咲きの萩

阪根 てる野

樋口 やよい

俳句

新涼や松百幹の匂ひたつ

四方 和美

天高し広場にこだます子等の声

大槻 京女

川柳

親子鴨平和願ってなごむ池

桐村 久美子

山野草小道抜けければ猿の園

足立 佳子

第四十三回 平成二十九年（二〇一七）

御霊神社

短歌

光秀公祀られ在す御霊神社祭りの果てて鎮もる宮居

田中 延子

俳句

光秀を偲ぶ影濃し秋祭

大林 令呼

川柳

残照を彩る御霊に弾む声

近藤 真由美

養泉寺

短歌

菽寺の菽の茂りに咲く花の白の零れて御仏の手に

林田 智里

俳句

一村に峰地寺の風菽の風

田淵 桂子

川柳

養泉寺こころ静まる菽の寺

足立 順子

第四十四回 平成三十年度（二〇一八）

長安寺

短歌

薬師堂仏を見守る天井の龍の眼光深き彫り跡

大谷 勇

俳句

石庭の渦となりけり散紅葉

芦田 伊津子

川柳

鐘の音に誘われ逢えるかも紅葉

藤原 美代子

醍醐寺

短歌

元旦の雪の醍醐寺照る朝日煌めきており年月の翳

岩滝 徹

俳句

千年杉ひねもす読経の法師蟬

塩見 むつみ

川柳

仏心を薬師如来に求めゆく

吉良 啓子

第四十五回 平成三十一・令和元年度（二〇一九）

観音寺

短歌

拝みて我に返らん仁王の眼万の紫陽花誇る観音寺

田中 久枝

俳句

手を引かれゆく紫陽花の仏径

塩見 八重子

川柳

あじさいの彩響き合う観音寺

田中 一郎

第四十六回 令和二年度（二〇二〇）

福知山城

短歌

石ぐみのふりて鎮める城門の青葉に映ゆる福知山城

松山 加代子

俳句

秋天を蹴り上げてゐし城の鯨

藤谷 方子

川柳

古に心引き込む深き井戸

横川 和子

第四十七回 令和三年度（二〇二二）

天寧寺

短歌

（該当なし）

俳句

方丈に丸二の幕や雲の峰

後藤 一郎

川柳

四季の彩深く漂う薬師堂

藤田 富子

第四十八回 令和四年度（二〇二二）

三段池公園

短歌

春桜夏は水鳥秋紅葉冬雪踏みて湖畔の夢よ

山口 秀樹

俳句

秋の空マラソン青年風を切る

西村 白杼

川柳

清涼の湖面ころがる笑みの声

熊谷 英子

第四十九回 令和五年度（二〇二三）

洞玄寺

短歌

崩れ散る白いぼうたん魂のもどりゆく場所菩提寺の庭

田中 延子

俳句

身に入むやゆつくり回す摩尼車

田中 富子

川柳

昭和の日遊び場だったぼたん寺

根垣 万里子

第五十回 令和六年度（二〇二四）

御霊神社

短歌

光秀の御霊眠れるごりようさんお頼みますいついつまでも

樋口 やよい

俳句

光秀をたたへ丹波の踊り笠

水巻 令子

川柳

水色桔梗咲いて御霊に踊りの輪

長田 和子

編集後記

本作品集は、「文学のしるべ」事業によって建立された俳句・短歌・川柳作品の数々を一冊にまとめたものです。半世紀の長きにわたり、多くの方々の応募と御協力を得て、地域に息づく文学の力と人々の想いを句碑の形で伝えてまいりました。

作品の一つ一つには、その土地の四季の移ろいや歴史の記憶、そして生活の喜びや哀しみが凝縮されています。建立作品は、訪れる人々に語りかけ、また新たな想像や共感を呼び起こしてきたことと思います。

本事業はここに幕を下ろしますが、作品に込められた思いや、文学を愛する心は、今後も受け継がれていくはずです。本作品集が、これまでの歩みを振り返り、また次代の文化への架け橋となれば幸いです。

最後に、この事業に関わられたすべての皆様に深く感謝申し上げます。編集後記といたします。

文学のしるべ実行委員会 委員長 大槻 紘



福知山市文化協会創立八十周年記念

文学のしるべ建立作品集

句歌の余光

— 福知山に咲いたことばたち —

発行日 令和八年五月

発行者 公益社団法人福知山市文化協会

福知山市和久市町二一六

福知山市上下水道部厚生棟内